



TITLE:

ロックにおける貨幣数量説のミクロ的基礎 (菱山泉教授記念號)

AUTHOR(S):

根岸, 隆

CITATION:

根岸, 隆. ロックにおける貨幣数量説のミクロ的基礎 (菱山泉教授記念號). 經濟論叢 1987, 139(1): 22-38

ISSUE DATE:

1987-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/134180>

RIGHT:

經濟論叢

第139卷 第1号

菱山泉教授記念號

献 辞	池 上 惇	
經濟表のプロブレマティーク	平 田 清 明	1
ロックにおける貨幣数量説のミクロ的基礎	根 岸 隆	22
関係レントとその分配交渉	浅 沼 萬 里	39
消費者余剰とローザンヌ学派	山 下 博	61
均斉成長の不均衡動学分析	山 谷 恵 俊	82
機械化と労働雇用	塩 沢 由 典	109
1930年代の経済学再考	伊 東 光 晴	130
資本の限界効率と使用者費用	瀬地山 敏	156

菱山 泉 教授 略歴・著作目録

昭和62年1月

京都大學經濟學會

ロックにおける貨幣数量説のミクロ的基礎

根 岸 隆

I

経済理論および経済学史の分野における菱山泉教授の貢献には重要なものが数多いが、そのなかでもケネーの経済表に関する研究（文献〔12〕、〔13〕）はもっとも有名なもののひとつであるといえよう。周知のように、再生産の供給面を重視する経済モデルであるとする経済表の伝統的諸解釈によっては、支出パターンの重要性を主張するケネーの重農主義的見解、農産物にたいする高い消費性向は経済成長を促進し、工業製品にたいする高い消費性向は経済を衰退に導くという見解を擁護することは不可能である。それに対して、菱山教授の経済表の研究は、ケインズの乗数モデルや投入産出分析のモデルと同様な需要面を重視した経済モデルを構築し、ケネーの重農主義的な見解を支持しうのような結果を導出することが可能であることを論証したことに意義があるといえよう。ケネーの経済表に関する菱山モデルの存在は国際的にはひろく知られており、多くの著名な学者によって引用されている¹⁾。この点では、わが国における経済学史研究の分野において、きわめて例外的なことであるといえる。

菱山教授の定年御退官を記念するこの小論においてわれわれは、ジョン・ロックの価値論がその貨幣数量説、必ずしも古典的数量説とは同一でない数量説のミクロ的基礎として成功していることを、簡単な経済モデルを構築することによりあきらかにしたい。そのためには、商品のはけ口（vent）と数量の比率に関するロックの理論を、従来のように誤って需要と供給の比率に関する理論

1) われわれが知るかぎり、菱山〔12〕は、イーグリィ〔6〕、エイカランド・ヘバート〔7〕（79ページ）、エルティス〔8〕、〔9〕（340、344、359ページ）、およびサミュエルソン〔21〕によって引用、言及されている。

であると解してはならない。以下、第Ⅱ節においては、ロック自身の言葉により、はけ口と数量の比率によるその価値論が需要と供給の比率による価値論とは異なることをあきらかにする。第Ⅲ節は、はけ口が重要な役割を演ずる簡単な経済モデルを構築し、はけ口と数量の比率により価格を説明するロックの理論が正しいかどうかを検討することにあてられる。最後に第Ⅳ節においては、貨幣数量説のミクロ的基礎として考えるかぎり、ロックの価値論は正しいことをあきらかにし、貨幣商品のはけ口に関するロックのふたつの異なった見解の優劣を論ずることにしたい。

II

ジョン・ロックの「利子の引下げおよび貨幣の価値の引上げの諸結果に関する若干の考察」(1691年)は「一議員への書簡から」という副題がついており、当時下院に上程されていたふたつの法案、法定利子引下法案と鑄貨標準変更法案とに反対する、きわめて時事的な経済政策に関する議論である。しかし、ロックはきわめて基礎的な価値に関する理論から議論をはじめ、さらにそれにもとづいて彼の貨幣数量説を展開するのである。その価値の理論において、ロックの関心は商品の内在的価値ではなく、その市場価値にある。

「1. ある物の内在的自然的価値は、人間生活の必要をみたすか便益に役立つかするところの適性に存する。それがわれわれの生存に必要であればあるほど、またそれがわれわれの福祉に貢献すればするほど、その物の値うちはいっそう大きい。しかし、2. ある物の一定量を常に他の物の一定量と等価値にさせるような固定的な内在的自然的価値はどんな物にも存在しない。3. 二ないしそれ以上の商品のある一定量の市場価値は、それらが相互に交換される場合、このところこの時には相等しい。」(ロック[16], 64—65ページ)。

このような市場価値ないし価格は、需要と供給の比率ないし割合によってではなく、需要と供給の均等によって決定される。このことは J・S・ミルによってはっきりと解決されている。「割合という観念は、需要と供給とのあいだ

に使用した場合は不適當であり、問題と何の関係もないものである。数学的な類比として適切なものは、むしろ方程式という類比である。……ある商品がある市場においてもつところの価値は、その市場において、現存の供給、あるいは予想される供給を消化するのにまさしく足りるだけの需要を生じさせるような価値以外の価値ではないであろう。」(ミル[18], 51ページ)。もちろん、これは需要と供給の比率ないし割合が価格の変化の方向を決定するという考え方を否定するものではない。しかし、必要な価格の変化の程度は、需要供給の不足ないし過剰の比率だけでなく、アダム・スミスが正しく述べているように、「競争者たちの富や放逸なげいたく……が、たまたま多かれすくなかれ競争熱をあおる」かいなか、「たまたまその商品を獲得することが……重要かどうか」、そして「たまたまその商品を即刻にも処分してしまうということが売手たちにとって重要かどうか」(スミス[22], 204—205ページ)などの要因にも依存するのである。結局、ミルが主張するように、「価値の騰貴あるいは下落は、需要と供給とがいま一度互いに等しくなるまで、つづくであろう」(ミル[18], 41ページ)から、需給の比率は価格変化の方向をきめるとしても、その変化の程度は需給の均等によってきまるわけである²⁾。

「ある商品の価値は購買者数と販売者数の比率によって騰落する」(ロック[16], 45ページ)という主張は、需要と供給の比率により価格が変化するという主張であると解することができるかもしれない³⁾。しかし、市場価値ないし価格の決定に関するロックの理論ははけ口と数量の関係において展開されているので、それを通常の需要と供給の均衡の理論として解釈することは容易にはできないのである。

「価格を規制するもの、すなわち貨幣と交換に与えられる〔商品〕量(それは売買と呼ばれる)、〔または〕他の一商品と交換に与えられる〔商品〕量(そ

2) ブラウグ[1], 196ページ, ミル[19], 391—404ページ, およびド・クウィンスィ[5], 118—129ページもみよ。

3) ボーリー[2], [3], 76ページ, 小林[14], 390ページ, およびスピーゲル[23], 162ページをみよ。

それは物々交換と呼ばれる)は、それらの販路に対するそれらの量の比率にほかならない。」(ロック[16], 53ページ)。

「ある物の価値を正当に評価しようとする者は、その販路に対するその量の比率について考察しなければならない。というのは、その価格を規定するのはこれだけだからである。それ自体と、あるいは不変の尺度と比較したある物の価値は、その量が販路と比較してより少いときにより大きくなる。しかしある物を他のあるものに比較したり交換するさいには、後者の量と販路もまた、それらの価値の計算においてしんしゃくされねばならない。」(ロック[16], 60ページ)。

「4. 他の一商品に対する、あるいは不変的な共通尺度に対する、ある商品のこの市場価値の変化は、その商品の内在的価値あるいは品質を何ら変えることなく(というのはカビ臭い黒穂病の穀物でも、時には別の時期のきれいでおいしい穀物よりも高く売られるからである)、その商品が他の物に対してもっているある比率の変化に他ならない。5. あらゆる商品——貨幣もその一つである——におけるこの比率は、それらの数量の販路に対する比率のことである。」(ロック[16], 65ページ)。

ここで数量(quantity)とは単に所与の供給量のことであると解することができるであろうが、販路(vent), すなわちはけ口とは通常の意味の需要量とはことなる。ロックは次のように、それを実現した販売量であると定義しているからである。

「販路は交換によって商品が一人の所有者から他の所有者に移ることに他ならず、同じ時間内に、ある種の商品のより大きな数量がその所有者から持ち去られるとき、その販路はより迅速だと言われるのである。6. この販路は、販売可能な商品量がトレードの通路および過程の外に移され、人々のための交易から引き離され、もはや交換範囲内になくなることの多寡によって、すなわち販路が早くなったり遅くなったりすることによって、規制される。」(ロック[16], 65—66ページ)。

しかしながら、すでに1705年において、ジョン・ローの「貨幣と商業」は、通常の需要と供給の観点からロックの理論を解釈し、再構築することにふみきっているのである。

「商品の価値は、その捌け口 (Vent) に比較された存在量によるとロック (Locke) 氏は述べている。商品の捌け口はその存在量を超えることはできないが、需要はこれを超え得る。例えばフランスからもたらされた葡萄酒の量が100トンであり、需要が500トンであるならば、需要は捌け口を超えている。そしてこの100トンは、需要が捌け口に丁度同じである場合よりも、はるかに高い価格で売られるであろう。かくして商品の価格は、捌け口に比較された存在量によるのではなく、需要の作用によるのである。」 (ロー [15], 205 ページ⁴⁾)。

この、はけ口を需要におきかえるべきであるというローのロック解釈は、多くの学者によって踏襲されてきた。ボーリー ([2], [3], 77ページ) はそのロック理論の説明において、ローの議論をコメント抜きで引用している。スビーゲル ([23], 162ページ) はロックの価値、価格論において、「供給ないし数量が需要ないしはけ口と対比される」と説明している。コーリィ [4] は、ロックの経済法則のひとつは「市場価値は供給と需要 (それを彼は数量とはけ口と呼んだ) の比率に依存する」ということであつたと論じている。レイ [17] によれば、ロックは「その価値が需要供給の作用 (はけ口に対する数量の関係) に反応するという点で貨幣は他の商品と違わないことを示した」のである。平瀬 [11] は、「販路とは需要であり数量とは供給である」と述べている。最後に、羽島 [10] によれば、「捌け口は貨幣の裏付けをもつ需要を意味」することもあり、また「捌け口はむしろ人々の財貨に対する欲望といったほどの意味をもっているにすぎない」こともある。

しかし、ジョン・ローに従って、はけ口を需要におきかえて、ロックの価値

4) 最後の文章は直訳すれば「かくして商品の価格は、捌け口に比較された存在量によるのではなく、需要に比較された存在量によるのである」となる。

理論を、価格は需要と供給の割合によって決定されると再構築するならば、すでにミルによって批判されているように、それはまったく意味をなさなくなる。このことは、ジョン・ロー自身の水とダイヤモンドの議論をみればあきらかである。

「財の価値は、人がこれを用いる用途から生ずるものである。そしてその価値の大小は、用途の重要性や必要性の大小に比例するというよりは、むしろわれわれがそれに対して有する需要に対して、その存在量 (Quantity) が大であるか小であるかによるものである。例えば水は非常に大きな用途を有するものであるが、その存在量は需要よりもはるかに大であるから、交換価値は小さいのである。ダイヤモンドは僅かな用途しかもたぬが、しかもその需要は存在量をはるかに超えているので、大きな価値を有するのである。」(ロー [15], 204 ページ)。

もし価格が十分に高ければ、ダイヤモンドの需要といえども供給 (数量) より大ではありえないし、ダイヤモンドの均衡価格はもちろん需要と供給の均衡によって決定される。さらに、自由財でない場合には、つまりいやすくも交換価値がある場合には、水の供給は需要よりも大ではない。

ジョン・ローのロック解釈から250年以上もたって、やっと次のようなヴォーンの主張があらわれた。「ロックの価格理論は初期的な需要供給分析ではなかった。」(ヴォーン [24], 25ページ)。「はけ口と現代的な需要の概念とは同一ではない。」(ヴォーン [24], 26ページ)。彼女によると、貨幣の価値の決定を説明することを目的として「ロックが展開していた価格理論にとって、はけ口という用語はことのほか適切であった」のである。(ヴォーン [24], 20—21ページ)。しかし、いったいどうして価格ははけ口と数量の比率、現代的に言えば、実現した販売量と供給可能量の比率によって規制されるのかという疑問はいぜんとして残っている。換言するならば、ロック価値理論の原型を擁護するためには、なぜ商品の価格はその回転率が高い時は高くなるのかを説明しなければならない。

III

はけ口という概念が本質的に重要な役割を演ずるような、静態経済の簡単なモデルを構築してみよう。個々の供給者にとって、新たに獲得して商品のストックを売りきるためには2週間の時間が必要であり、したがって今週のはけ口は提供しうる商品の総量よりは小さいが、2週間にわたっての需要と供給は均衡しているものとする⁵⁾。はけ口が数量より小さくなる理由は、今週の市場が不完全である、つまり情報が限られており、売手、買手をさがすのに時間と費用がかかるからである。したがって、今週の販売量を増加させるためには価格を引き下げざるをえない。

新たに獲得した商品ストック S を持つある供給者が直面する今週および次週の需要関数はそれぞれ

$$(1) \quad p_1 = a - b x_1$$

および

$$(2) \quad p_2 = q$$

であり、また貯蔵費用関数は

$$(3) \quad C = c_1 + c_2 x_2 + c_3 x_2^2$$

であるとする。ただし、 p_1, p_2 は価値尺度財（ニュメレール）ないし抽象的計算単位⁶⁾で表示した今週および次週の価格であり、 x_1, x_2 は今週および来週の需要量であり、そして、 a, b, c_1, c_2, c_3 および q はすべて正の常数である。供給者は次週の市場は完全であり、無限に弾力的な需要曲線に直面しうると期待する。換言すれば、長期的には長期正常価格 q でいくらかでも販売することができると期待する。需要と供給は2週間を通してみれば均衡しているのだから、

$$(4) \quad x_1 + x_2 = S$$

が成立していなければならない。(1) - (3) から、供給者はその利得

5) 次週（第2週）は視野に入る全将来期間を代表するもので、今週（第1週）よりかなり長期間になるとと思われる。

6) 抽象的計算単位については、バティンキン [20], 18ページをみよ。

$$(5) \quad (a - bx_1)x_1 + r[q(S - x_1) - c_1 - c_2(S - x_1) - c_3(S - x_1)^2]$$

を最大にするように、そのストック S を x_1 と x_2 の間に配分することになる。ただし、 r は 1 より小さい正の常数であり、供給者の時間選好をあらわすものである。

ロックは独占者が供給を制限することにより価格を引き上げることができることを知っていたようであるが、収入を最大化するような最適価格の概念は彼にはなかったようである（ヴォーン [24]，59 ページ）。したがって、ロック自身は彼の問題を利得の最大化というかたちでのべることはなかった。しかし、ロックが経験と直観とによって到達した結論、すなわち、商品の今期の価格とその今期のはけ口と数量の比率とが同方向に変動するという結論を論理的に導出するための設定として、利得 (5) の最大化という考え方は不自然なものではないであろう。

利得 (5) の最大化のための条件は、もちろん、限界利得が 0 であることであり、(5) を x_1 で微分することにより

$$(6) \quad (a - rq + rc_2) - 2(b + rc_3)x_1 + 2rc_3S = 0$$

が得られる。これは、 S, q, a, b, c_2, c_3 および r が所与のとき、 x_1 について解くことができる。換言すれば、今期の需要量ないしはけ口 x_1 は S, q, a, b, c_2, c_3 および r の関数になる。一方、今期の価格 p_1 は (1) により a, b, x_1 の関数である。ロックによれば、今期の価格 p_1 は、はけ口と数量の比率 x_1/S が高いときに高くなるというが、われわれのモデルにおいては如何であろうか。

まずはじめに、数量 S が変化することにより比率 x_1/S が変化する場合について、ロックが正しかったかどうかを検討しよう。利得最大化の条件 (6) を x_1 と S で微分することにより、

$$(7) \quad dx_1/dS = rc_3/(b + rc_3) > 0$$

を得る。すなわち、数量 S の増大ははけ口 x_1 の増加をひきおこす。今週の需要曲線 (1) を考慮すれば、これは今週の価格 p_1 が低下することを意味する。すなわち、

$$(8) \quad dp_1/dS = (dp_1/dx_1)(dx_1/dS) < 0$$

である。一方、(6)と(7)から

$$(9) \quad d(x_1/S)/dS = (rq - a - rc_2)/2S^2(b + rc_3)$$

を得るが、もし a が q に較べてあまり小さくなければ、これは負である。したがって、この場合には、価格とはけ口と数量の比率とは同じ方向に変化する。

次に、数量 S は変化しないとして、今週の需要が増加することによりはけ口 x_1 が増加する場合を考えよう。今週の需要曲線(1)から、今週の需要の増加は、 a の増大ないし b の減少を意味する。条件(6)を x_1 と a とで微分することにより、

$$(10) \quad dx_1/da = 1/(2b + 2rc_3) > 0$$

を得た。一方、(1)を微分して、

$$(11) \quad dp_1/da = (b + 2rc_3)/(2b + 2rc_3) > 0$$

となる。同様に、(6)を x_1 と b で微分して

$$(12) \quad dx_1/db = -x_1/(b + rc_3) < 0$$

を得る。さらに(1)を微分して

$$(13) \quad dp_1/db = -rc_3x_1/(b + rc_3) < 0$$

となる。したがってこの場合には、今週の価格 p_1 ははけ口 x_1 と同じ方向に変化する。数量 S は変化しないから、商品の価格ははけ口と数量の比率と同じ方向に変化するといえる。

今週の需要は、今期の市場をより完全に、より同質的に、より簡単化することにより、商品の回転率を高めれば増大させることができる。ロックの次の議論は多分このことを意味しているといえよう。

「次のことだけは明白である。すなわち、仲介業者の増加は、貨幣の循環する範囲を広げることによって、所与の国のトレードを妨害し、またその循環に際して貨幣をいっそう停滞させる結果、回収が必然的にいちだんと緩慢でしかも不十分になり、トレードに損害を与えるにちがいない。……もしそうだとすれば、生産者 (Artificers) にあらゆる奨励が与えられ、また、物をつくる人間

が同時にできるだけ彼ら自身の商品¹⁾を販売・小売りし、国内では商品が多くの人手を通して最終購買者の手に渡っていくことができるだけ抑制されるように、物事が秩序づけられるべきであることは疑う余地がない。」(ロック [16], 42ページ)。

また、少くとも一時的には、貨幣量の増加は、今期の需要を増加させ、商品の²⁾はけ口を増大させると考えられる³⁾。このためには、次のロックの議論を多少、拡大解釈してみればよからう。

「ある商品の販路は、流行が変化するさいにみられるように、その国民の間に流通する現金のより大きい部分が、同じ時に種々の人々によって他の財貨よりもその財貨にたいして投じられるように仕組まれているかどうかによって増減する。」(ロック [16], 45—46ページ)。

とにかく、以上において考察した場合についてみれば、「それ自体と、あるいは不変の尺度と比較した」商品の価格は⁴⁾はけ口と数量の比率が高ければ高くなるというロックの主張は正しいといえる。今週の価格 p_1 は価値尺度財(ニューメラル)ないし抽象的計算単位で表示されており、また同様に表示されている次週の価格 q は所与で不変であるからである。しかし、これはロックがいつも正しいことを意味するわけではない。今期の需要関数(1)に関係のない、 q, c_2, c_3, r のようなパラメーターが変化した場合を考えよう。この変化によって誘発される x_1 の変化にたいして、(1)からあきらかなように、 p_1 は逆の方向に変化することになる。商品の数量 S は変化しないのだから、この場合には商品の価格 p_1 は⁵⁾はけ口と数量の比率 x_1/S と逆の方向に動く。したがって、ロックの主張は正しくないことになる。

IV

しかし、ロックの価値理論はもともとどのような場合においても正しい一般

7) この場合、長期には a, b 以外のパラメーターも変化するであろう。しかし、たとえば q の変化がはけ口におよぼす効果はそれと同率の a の変化がおよぼす効果にくらべて小さい。

的な理論としても主張されたものではなく、物価水準を説明するための貨幣数量説のミクロ経済学的基礎として構想されたものであると、ロックを擁護することはできよう。これはまた、次に引用するように、ヴォーンが強調するところでもある。「ロックは「若干の考察」において、もっぱら貨幣の価値の決定を説明するために、その価値理論を展開したのでであると主張することができる。……ロックの経済学の研究のひとつの重要な成果は、彼がその価値理論を貨幣商品に適用することにより、理論的基礎をもつ貨幣数量説を展開することができたことである。それ以前の多くの「貨幣数量説」は単なる経験的観察の叙述にすぎなかったのである。」(ヴォーン [24], 31-32ページ)。

もしそうであるならば、ロックが価格とはけ口と数量の比率との関係の理論を適用することにより、貨幣数量と物価の関係を説明することに成功しているかぎり、われわれは満足しなければならない。すでにみたように、貨幣数量の増加は他の商品のはけ口を増加させ、商品の回転率を高めるが、貨幣を価値尺度財(ニュメレール)と考えるならば、これは物価水準の上昇を意味する⁸⁾。しかし、貨幣数量と物価の関係をより直接的に考察するためには、貨幣のはけ口と貨幣の数量の関係も考察しなければならない。「ある物を他のある物〔貨幣〕と比較したり交換するさいには、後者の量と販路もまた、それらの価値の計算においてしんしやくされねばならない」からである。

「貨幣は決して人々の手中で遊んでいたり、販路に欠けたりすることはないので(というのは、誰でも交換においては好きな時に貨幣を手離しうから)……このようなわけで、〔貨幣〕以外の諸商品の方がより急速な販路をもったり、緩慢な販路をもったりするが、それは誰も諸商品については、彼が感じる効用に応じて以外にはそれらに貨幣を消費せず、それには限界があるからである。しかし貨幣は万能であるがゆえに、誰もが際限なく喜んで貨幣を受け取り、手許におこうとする。それゆえ貨幣の販路は常に十分であるが、あるいは十分

8) 貨幣数量の変化が諸商品の回転率に効果を与えるかぎりにおいて、ロックの数量説は古典的な貨幣数量説とはことなる。羽島[10]が正しく指摘しているように、貨幣数量の変化がことなる商品のはけ口と数量の比率にことなる効果を与えるならば、貨幣は中立的ではない。

以上である。したがって、その価値を規定し決定するには、その量だけで足り、他の諸商品のようにその数量と販路との間のいかなる比率をも考慮する要はない。」（ロック [16], 68—69ページ）。

ヴォーン ([24], 37ページ) は、このロックの文節を解釈することは容易ではないとのべている。そして事実、この文節の解釈については学者の意見はわかれており、さまざまな解釈がある（レイ [17] をみよ）。しかし、前節で説明したわれわれのモデルの観点からみれば、この文節の意味するところは簡単明瞭である。貨幣商品の市場は今週についてさえほぼ完全であるから、そのはけ口は数量に一致してしまうのである。

われわれのモデルにおいて、問題の商品は交換手段としての貨幣であるとし、 p_2 は貨幣以外の価値尺度財（ニュメレール）ないし抽象的計算単位で表示した貨幣の交換価値ないし価格であるとする。今週の市場はほとんど完全で、需要曲線(1)における b の値が非常に小さいから、貨幣供給者の利得(5)から得られる限界利得

$$(14) \quad (a - r q + r c_2) - 2b x_1 + (2r c_3 S - 2r c_3 x_1)$$

は、はけ口 x_1 が数量 S に等しくなってもいぜんとして正である。これは、 $x_1 = S$ であれば(14)の最後の項は0になり、かつ最初の項は、以前のように、正であると考えられるからである。定義により $x_1 \leq S$ であるから、この場合には利得(5)は $x_1 = S$ でコーナー・マキシマムになっている。換言すれば、貨幣商品の場合は回転率 x_1/S が最大になるのである⁹⁾。したがって、限界利得(14)が正であるかぎり、数量 S の増加ははけ口 x_1 の同量の増加をひきおこし、(1)を通じて p_2 は下落する。

そのはけ口はいつもその数量に等しいのだから、価値尺度財（ニュメレール）ないし抽象的計算単位表示の貨幣商品の価値はその数量のみにより規定される。もちろん、一般均衡理論の観点からみれば、(1)にあらわれる貨幣にたいする今期の需要は、販売される、つまり貨幣と交換されるすべての商品のはけ口の

9) ここにいう貨幣商品の回転率 x_1/S は、いわゆる貨幣の流通速度ではない。注12) をみよ。

価値（貨幣表示の）と独立ではない。この点はわれわれの部分均衡分析のモデルでは陽表的には考慮されていないが、(1)における貨幣にたいする需要の考え方はこの点と矛盾するわけではない。数量 S の増加ははけ口 x_1 の増加をもたらし、貨幣価値 p_1 の低下をまねくが、これは物価水準の上昇を意味し、他のすべての商品のはけ口の価値（貨幣表示の）の増加と矛盾しないからである¹⁰⁾。さらに、ロックもこの点を認識していたように思われる。「貨幣の自然的価値は、王国の全トレード（すなわち）、全商品の一般的販路に比してのその時点における王国の全流通貨幣量に依存している。」（ロック [16], 70ページ）。一方、ある一商品と貨幣の間の相対価値については、貨幣の数量だけではなく、その商品のはけ口と数量の比率も考慮しなくてはならない。「ある一商品と交換される場合の貨幣の自然的価値は、その単一商品およびその販路に比しての、その商品に振り向けられた王国の取引貨幣量に存する。」（ロック [16], 70ページ）。このことは、この商品の価値尺度財（ニューメレール）ないし抽象的計算単位表示の価格がそのはけ口と数量の比率と同方向に動くかぎりにおいて、正しい。貨幣の同様な価格はその数量のみによって定まるからである。

したがって、われわれの「貨幣の販路は常に十分であるか、あるいは十分以上である」からはけ口はいつも数量に等しくなる、という解釈は、ロックの「若干の考察」における、貨幣の価値を定めるものは利子率でなく貨幣の数量であるという主張に矛盾しない。

「たとえば、イングランドにおいては、銀半オンスが、まるまる一ブッシェルの小麦と交換される時もあるが、半ブッシェルまたはわずかに四分の一ブッシェルと交換される時もある。このことは、半オンスの銀が所有者にそれ自身の重量一〇〇ポンドに対して年に六ポンドの利息をもたらし傾向があるうと、全然何ももたらさなかろうとも、同じように起ることである。王国の貨幣量に依

10) 貨幣数量 S の変化が諸商品のはけ口に効果をもつかぎり、貨幣にたいする総需要の弾力性は1より大きい。もちろん、個々の貨幣商品の供給者にとっての需要の弾力性は、貨幣の総需要の弾力性よりも大きい。

然変化がないものと仮定すれば、小麦の価格を変化させるのは、その販路に対する小麦の量の変化だけであり、またこんどは小麦の量はその販路に関しては同一であると仮定した場合には、王国にある貨幣量の変化が小麦の価格を変化させるのである。すなわち、いずれかの側の量が販路かを変化させるならば、必然的にその価格は変えられることになり、他の途はどこにもないのである。」(ロック [16], 61ページ)。

しかし、ロックはこの文節の議論をするに際しては、貨幣の \dot{p} は十分以上であるという考え方とは別の、貨幣の \dot{p} は一定であるという考え方を示している。

「貨幣に対する欲求は常時存在し、ほとんどどこでも同一不変であるから、貨幣の不足をたやすく埋め合せる物が他にないため、貨幣の著しい欠乏がその価格を上昇させ、その争奪を激化させる場合を除いては、その販路はめったに変化しない。それゆえ貨幣量の減少は、常にその価格を上昇させ、等量の貨幣をより多くの任意の他の物品と交換させる。」(ロック [16], 60ページ)。

ヴォーン ([24], 37, 142—143ページ) は、ロックは貨幣に対する需要は一定であると考えていると解すべきだと主張し、そしてロックが必需品の価格について説明している場合と同様であると指摘している。

「人間は、なくとも間に合うものより、絶対必要なものにはいくらかでも金をさくということほど、日常経験上確かなことはない。そのような物の場合には、その稀少性だけが価格を形成する。」(ロック [16], 46ページ)¹¹⁾。

われわれのモデルを若干の修正を加えることにより今期の需要が一定の場合に適用しよう。商品の供給者はその利得

$$(15) \quad p_1 x_1 + r(qS - qx_1) - r[c_1 + c_2(S - x_1) + c_3(S - x_1)^2]$$

を x_1 について最大化するものと考えよう。そのための条件は

$$(16) \quad p_1 - rq + rc_2 - 2rc_3(S - x_1) = 0$$

である。これから x_1 を p_1 と S の関数として解くことができる。条件(16)

11) ここで、「なくとも間に合うものより」は「なしですますよりは」であろう。

から容易に

$$(17) \quad \partial x_1 / \partial p_1 = 1/2rc_3 > 0$$

および

$$(18) \quad \partial x_1 / \partial S = 1$$

を得る。今期の需要は一定だから、

$$(19) \quad x_1(p_1, S) = D,$$

ただし D は正の常数である。したがって、(17)–(19)により、

$$(20) \quad dp_1/dS = -(\partial x_1/\partial S)/(\partial x_1/\partial p_1) < 0$$

となる。

すなわち、個々の供給者にとって今期の市場は完全であると考えれば、全体としてはけ口ないし今期の需要が一定である時には、価格は数量のみにより規制されるというロックおよびヴォーンの主張は正しい。しかし、貨幣商品の場合には、け口が一定であると仮定することは越え難い困難をひきおこすことになる。一般均衡理論の観点からみるならば、貨幣のけ口はすべての商品のけ口の価値（貨幣表示の）の和に等しくなるので¹²⁾、貨幣数量の変化にともなう貨幣の価値、つまり物価水準の変化は貨幣のけ口の変化をひきおこすからである。したがって、貨幣のけ口は一定であると考えすることは、貨幣の場合にはけ口と数量とが一致すると考える場合にくらべて、ぜんぜん魅力がないといわざるをえないのである。

12) したがって、今期の市場がより完全化され、諸商品のけ口（回転率）と価格が上昇すれば、貨幣のけ口も増大しなければならず、貨幣のけ口と数量とは等しいと考えれば、貨幣数量 S が増大する。すなわち、貨幣の場合は、 S をストックに流通速度を乗じたものであり、け口と同様にフローであると考えなければならない。

文 献

- [1] Blaug, M., *Economic Theory in Retrospect*, Cambridge University Press, 1985.
- [2] Bowley, M., "Some Seventeenth Century Contributions to the Theory of Value," *Economica*, 30 (1963), pp. 122-139.
- [3] Bowley, M., *Studies in the History of Economic Theory before 1870*, Macmillan, 1973.
- [4] Colie, R. L., "Locke, John," D. L. Sills ed., *International Encyclopedia of Social Sciences*, 9, Macmillan, 1968, pp. 464-471.
- [5] De Quincey, T., *The Logic of Political Economy*, Blackwood, 1844.
- [6] Eagly, R. V., "A Physiocratic Model of Dynamic Equilibrium," *Journal of Political Economy*, 77 (1969), pp. 66-84.
- [7] Ekelund, R. B., and R. F. Hébert, *A History of Economic Theory and Method*, McGraw-Hill, 1983.
- [8] Eltis, W. A., "François Quesnay: A Reinterpretation, 1, The Tableau Economique," *Oxford Economic Papers*, 27 (1975), pp. 167-200.
- [9] Eltis, W. A., *The Classical Theory of Economic Growth*, Macmillan, 1984.
- [10] 羽島卓也, ジョン・ロックの政治哲学と経済理論(2), 「商学論集」22-3 (1953), 82-125ページ。
- [11] 平瀬己之吉, 「古典」経済学の基本命題(2), 「商学論集」22-3 (1953), 44-81ページ。
- [12] Hishiyama, I., "The Tableau Economique of Quesnay," *Kyoto University Economic Review*, 30-1 (1960), pp. 1-45.
- [13] 菱山泉, 「重農学説と「経済表」の研究」, 有信堂, 1962。
- [14] 小林昇, 「経済学史著作集」, 3, 未来社, 1976。
- [15] 吉田啓一, 「ジョン・ローの研究, 附・「貨幣と商業」全訳」, 泉文堂, 1968, 202-316ページ。
- [16] ジョン・ロック, 「利子・貨幣論」, 田中正司・竹本洋訳, 東京大学出版会, 1978。
- [17] Leigh, A. H., "John Locke and the Quantity Theory of Money," *History of Political Economy*, 6(1974), pp. 200-219.
- [18] J. S. ミル, 「経済学原理」, 3, 末永茂喜訳, 岩波書店, 1960。
- [19] Mill, J. S., *Essays on Economics and Society*, University of Toronto Press, 1967.
- [20] Patinkin, D., *Money, Interest and Prices*, Row, Peterson and Co., 1956.

- [21] Samuelson, P. A., "Quesnay's Tableau Economique as a Theorist would Formulate it Today," I. Brandley and M. Howard eds., *Classical and Marxian Political Economy*, Macmillan, 1982, pp. 45-78.
- [22] アダム・スミス, 「諸国民の富」, (1), 大内兵衛・松川七郎訳, 岩波書店, 1959。
- [23] Spiegel, H. W., *The Growth of Economic Thought*, Duke University Press, 1983.
- [24] Vaughn, K. I., *John Locke*, University of Chicago Press, 1980.